



Newsletter

日本在宅ケア学会

No.11

2018年3月発行

一般社団法人日本在宅ケア学会
事務センター
〒162-0825
東京都新宿区神楽坂 4-1-1 オザワビル
TEL:03-5206-7431
FAX:03-5206-7757

平成 29 年度講座日より

第 22 回日本在宅ケア学会学術集会 生涯教育委員会セミナー，学会活動推進委員会企画より

生涯教育委員会セミナー

アクションリサーチについて学ぼう；
研究活動の促進のために

演者 袖井 孝子（お茶の水女子大学名誉教授）
演者 合田加代子（甲南女子大学看護リハビリ
テーション学部）



袖井孝子先生



合田加代子先生

■セミナーを聴講して■

在宅ケアの「場」での実践者と研究者が協働して行う研究のアクションリサーチについて学ぶセミナーが開催されました。セミナー前半は袖井孝子先生（お茶の水女子大学）が「アクションリサーチの理論と実践」と題し、講演されました。アクションリサーチは「場」に応じた課題解決をねらいとし、課題解決に向け見直し修正しながら進めていく循環過程があり、結果よりもそのプロセスが重要であると話されました。また、実践例を交えながら研究の計画立案や倫理的配慮、研究の進行についてお話くださいました。

後半は合田加代子先生（甲南女子大学）が「住民主体の孤立予防型コミュニティづくり」

と題し、地域の孤立死を防止するという課題に向けて、地域住民と行政、研究者が協働して2005年から長い期間にわたって取り組まれたアクションリサーチの実際をご発表くださいました。地域の変化を肌で感じながら研究を進められたと話されましたが、紹介された写真から住民の方々と協働して進めるアクションリサーチの魅力が伝わってきました。アクションリサーチの実践に向けて多くのヒントと刺激が得られる有意義なセミナーでした。

大阪市立大学大学院看護学研究科

金谷 志子

学会活動推進委員会企画

「在宅における『食えること』のケア・支援：リレー講座①，在宅療養者における摂食嚥下・栄養障害の現状」

演者 榎 裕美（愛知淑徳大学健康医療科学部）

■講座を聴講して■

去る7月16日，北星学園大学で行われました第22回日本在宅ケア学会学術集会において，学会活動推進委員会公開講座が開催されました。2017度は「在宅における『食えること』のケア・支援」をテーマとし，リレー講座を3回企画しています。今回はその第1回目で愛知淑徳大学教授 榎裕美先生（栄養学）より「在宅療養者における摂食嚥下・栄養障害の現状」というタイトルで，地域高齢者の栄養における課題において，先生の御研究を交えエビデンスを基に御講演を頂きました。参加者数も多く，大変盛況な講座となりました。

低栄養は老年症候群の出現や生命予後に影響すること，さらに要介護度の軽度の在宅高齢者の栄養問題が見過ごされている可能性があること述べられていたのが大変印象的でした。また在宅での経口摂取のアセスメントを誰がどのタイミングで行うか，介護者の食事の準備の負担と対策についても御話頂きました。地域高齢者への「食える」支援は，食材の調達から飲食する全ての過程を含み，多角的な視点で多職種によるアセスメントと支援，実施するためのシステムの再構築が必要であることを学び，改めて在宅における「食える」支援の奥深さを感じました。

東北大学医学部保健学科

安藤 千晶

政策提言検討委員会企画

報酬改定に向けたエビデンスをどう作るか

演者 福井小紀子（大阪大学大学院医学系研究科）

■講座を聴講して■

わが国では高齢化率の進行に伴い，社会保障費の低減などを目的とした施設から在宅への流れを推進してきた。団塊の世代が75歳以上になる2025年以降，医療や介護のニーズはますます高まる見通しであり，高齢者が人生の最期まで住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けるために必要な支援体制（在宅ケアシステム）の構築が重要である。

講座では，大阪大学大学院医学研究科の福井小紀子先生が，2018年度に同時改訂となる診療報酬と介護報酬の背景や動向，医療介護サービスの質の向上や新たな策定のために明確なエビデンスデータの蓄積が必要であることを講義された。訪問看護など在宅ケアでは成果の見える化が困難であること，報酬改定に向けたエビデンスデータのために看護師の行う研究が必要であることが学べた。

筆者自身は，看護師として活動していくなかで『報酬』や『資源』という部分に意識することは少なかった。しかし，本講座によって，限られた医療介護資源を本当に必要な人に適切に届けられるようにするために，看護の視点（QOLの向上やコストの適正化）を持った戦略立案といった発想が必要であることを実感することが出来た。

大阪市立大学大学院看護学研究科特任講師

池田 直隆



在宅ケア実践トピック

お茶のみ休憩所を活用した地域高齢者の 孤立予防

村尾空見子（地域福祉活動推進グループ主査）

大東市の総人口は減少傾向にあるが、世帯数は増加傾向にあり、なかでも65歳以上のひとり暮らし高齢者の世帯は急速に増えている。

また、第2期大東市地域福祉活動計画（2011～2015年度）策定に向けて取った統計データ「地域福祉に関する市民アンケート」の中で、「住んでいる地域に愛着を感じている」と『思う』人と「今後も長く住み続けたい」と『思う』人は、共に年齢が高くなるほど、その割合が多くなっていることが分かった。しかし、「ご近所の人との関係性」については『あいさつ程度がほとんど』が4割となっていた。

そこで大東市社会福祉協議会では、一歩踏み込んだ支え合い・助け合いの関係づくりに向け、気軽に立ち寄れる通いの場や“新たなみまもりの輪”の構築が必要と考え、同計画に「まちかどサロン（仮称）の充実」を重点事業として位置づけた。その時期に、厚生労働省が「地域支え合い体制づくり事業」を予算化したことを受け、本会の声かけのもと、2012年2月にお茶のみ休憩所「いこか」（1号店）を立ち上げることとなった。

「いこか」は空き家を活用し、校区福祉委員会や介護者家族の会を選出母体とした運営委員会が実施主体となっている。毎週水・木曜の11～15時を開所日とし、利用対象者は限定せず、出入りは自由。世話人により提供されるお茶やコーヒー、お菓子を食べながらおしゃべりを楽しんでいただく空間である。

開所1年後に実施した、利用者への聞き取り

開所日数	104日
利用者数（のべ）	2,246名（うち、男性1,028／女性1,218）
1日平均利用者数	21.59名

【お茶のみ休憩所「いこか」2018年度年間利用実績】



外観



「いこか」内部の様子

から、「気軽に気を使わない、自由に縛られないところがよい」（70代男性）。「色々な世代の方がいらっしゃるので、勉強になる。」（80代男性）。「私もそうやけど、ひとり暮らしが多いんです。いつまでも元気でいたいのでここに来てます。1回でも来たら次も来なくなる場所。」（70代女性）等の声をいただき、好評を得ている。

1号店をモデルとし、地区組織等の協力により、現在7か所で同様の機能をもった休憩所が開所されている。（2018年1月末現在）。いずれの休憩所も1日20名前後の利用があり、50～90代まで幅広い年齢層がおしゃべりを楽しんでいる。

利用対象者を限定しないこと、元気なうちに地域と繋がることを重視した活動を展開することで、住民同士の“お互いを気にかける関係性”が自然と生まれ、孤立予防や地域の見守り活動に繋がっている。1号店の開所から丸6年が過ぎ、利用者の満足度から一定の効果がみられるなか、本会は地域における新たな人材の発掘や育成の視点をもちつつ、今後も未実施地区へのアプローチを行っていく。

新卒看護師の育成を3年継続して

小川真里子（よどき訪問看護ステーション管理者）

1. 新卒看護師の成長

当訪問看護ステーションでは、2015年度より新卒看護師の育成を始めました。2015年度に2名、2016年度に2名、2017年度に2名、計6名の新卒看護師が入職し、訪問看護師として地域で活動しています。

新卒看護師は入職後の4月より現任の訪問看護師と同行訪問を積み重ね、看護の基盤を養います。具体的には同行の訪問看護師の看護ケアの見学と振り返りを行い、療養者と対話しながら、バイタルサイン測定、聴診、触診、排泄ケア、インスリン注射等の技術を習得します。7～9月には1事例目の単独訪問ができるように、事例を選定しつつ、同行訪問を続けます。単独訪問の事例には、本人もしくは家族が症状に気づくことができる、疾患や障害の重症化予防を支援している安定期の療養者としています。日常生活自立度や要介護度等は要件としていないため、週に数回の計画訪問を行っている要介護度の高い療養者を選定することが多く、現任の訪問看護師とチームを組んでケアにあたります。

10～12月には患者の経験を知ること、看護技術を習得すること、地域のなかの病院の役割や機能を考えること等を目的に病院での研修を行います。病院研修後は、単独での訪問件数を延ばしつつ、病状変化の時期や新たな看護技術の習得時等には同行訪問を行って経験を積みます。

3年目には新卒看護師のメンターとなって同行訪問を行い、後進の育成にかかわっていきます。また、オンコールのシフトに入り、支援を受けながら緊急時の電話相談に対応し、必要時には緊急訪問を行います。

2. 育成における支援体制

新卒看護師の育成にあたっては、グループ内



図1 1階に訪問看護ステーションがあります



図2 新卒看護師たちによる地域住民への研修風景

の病院看護部教育研修課と独自の育成プログラムを作成しました。大阪府訪問看護ステーション協会が2016年度から実施している育成プログラムにも参加し、新卒看護師、指導者、管理者が第三者の支援を受けています。

また、事業所の規模を拡大に向けて、新卒看護師だけでなく、看護実務経験のある新任看護師も入職しました。

組織のあり方として、弱みを見せてもよい安全な場所にできるよう、現任の訪問看護師への支援を強化し、事業所内での対話や感情の交流を奨励しました。うまくいかなかったことも受け止め、自ら前進し、チームで解決していけるように、互いに学び合い、支え合うようになり、看護チームとしての結束の高まりを感じています。

3. 育成の成果

基礎教育で在宅看護を学んだ新卒看護師が訪問看護分野から看護の道をスタートすると、その人なりの生活の営みを見て、1つとして同じ生活はないことを知り、医療や看護のあり方を広く深く考えることができるようになります。

わが国の未来を担う世代の看護師たちが、自立した看護師に成長すること願って、これからも無限の可能性を秘めた新卒看護師たちを支援していくことができる、機能強化型訪問看護ステーションでありたいと考えています。

船橋市における保健医療福祉の連携： 本人主体を市民協働で

藤田 敦子（NPO 法人千葉・在宅ケア市民
ネットワークビュー代表）

2013 年 5 月、船橋市は市民の「生活の質」の向上のため、医療・介護に関する団体に市民活動団体及び行政を加えた 19（現在 26）の団体で構成し、多職種連携を機軸とした船橋在宅医療ひまわりネットワーク（以降、ひまわりネットワーク）を任意団体として設立した。筆者が代表を務める NPO 法人は、以後フィールドを千葉県から船橋市に移し、同任意団体の一員として協働している。市がひまわりネットワークの事務局を担い、5 つの委員会を設置し、船橋市医師会受託の「在宅医療支援拠点ふなぽーと」と連携して、多職種連携により市民の生活を支えるための方策に取り組んでいる。

連携のあり方を検討する「顔の見える連携づくり委員会」は、入退院時の連携に関する困りごとを解決するために必要な約束ごとを「心得」と位置づけ、基本的な行動を明示した。①事前準備、②入院直後、③入院中、④退院に際して、⑤退院後と 5 つのカテゴリーに分け、在宅側（医療）、在宅側（介護）、本人・家族、病院側、それぞれに行ってほしいことを色別で示し、本人が希望する生活が送れるよう、できる限り在宅に戻ることを目指す。

研修体制を策定し企画実践を行う「人材育成委員会」は、基礎研修習得の「スタートアップ研修」や病院と在宅の連携を実践的に学ぶ「実践研修」を行い、研修修了時のポイント制を導入し、一定以上ポイントを取得した人に「ひまわりマイスター認定証」を発行しバッチを授与する。そしてマイスター認定者やもっと勉強したい人向けに「アドバンス研修」を設けることで、本人のその人らしさを支える支援を行えるようレベルアップを図る。

医療と介護が安心して提供される環境づくりを行う「安心の確保委員会」は、市民公開講座開催や患者情報共有システム検討以外に、本人の情報・緊急時の連絡先・緊急時の対応方法を記入し、冷蔵庫に保管できる「ひまわりシート」を作成した。ケアマネジャーや訪問看護師等が説明し、本人記入を原則とし、意思決定支援の役割も持つ。

資源情報の収集、ホームページの管理・更新を行う「資源管理委員会」は、市内で在宅医療を提供している「病院」「診療所」「歯科診療所」「保険薬局」「訪問看護ステーション」を調査し、提供機関マップを作成した。また、ホームページ（<http://himawarinet.jp>）を開設し、会員団体等の情報も発信している。

在宅医療に資する地域リハビリテーションを推進する「地域リハ推進委員会」は、市が実施している「地域リハビリテーション拠点事業」と連携・協力し、講演会や市内を北部・中東部・南西部に分割した多職種による地域密着型症例検討会の開催を行う。

2018 年までにすべての市町村が地域支援事業による在宅医療・介護連携を行う。その連携が、看とりを含め本人が望む暮らしができるように、『生きるため』の生を見つめ、尊厳をもって最期まで生きられるよう支援や環境づくりを行うことを願っている。

大学生と地域住民で取り組む介護予防・地域づくり

菅原 真枝（東北学院大学教養学部）

筆者のゼミでは 2016 年度より、宮城県仙台市泉区本田町（人口 625 人、世帯数 378、高齢化率 26.08%：2018 年 1 月現在）で、介護予防運動自主グループの運営のサポートを行っています。本田町は JR 仙台駅から車で約 30 分、泉区中心部からは車で 10 分、すぐそばを国道 4 号線が走り、周辺には大型商業施設が立ち並

表1 「スマもり」の運動メニュー
(2017年11月9日)

13:00	挨拶
13:05	ストレッチ
13:20	もみじ(手ぬぐいを使った運動)
13:30	AKB体操・KIYOSHI体操
13:45	レクリエーション(ボッチャ)
14:15	ティータイム



図2 オリジナルの手ぬぐい



図1 ストレッチの様子

ぶ、大変住みやすい地域です。もともとは山や田畑でしたが昭和40年頃から宅地化が進み、当時ここに家を建てられた方の多くは80歳代になられています。勾配の多い地域であるため、外出の機会を確保し、軽運動の習慣を身につけることにより、健康の維持や地域のつながりを強化することが課題です。

本田町には「ぬくもり会」というサロン会があり、15名ほどの会員が月1回の集会所での集まりを楽しみにされています。泉中央地域包括支援センターから「『ぬくもり会』で運動の時間を取り入れたいが、大学生の力を貸してくれないか」と相談があり、福祉のまちづくりについて学ぶゼミ生(教養学部地域構想学科3～4年、10名程度)と「ぬくもり会」との交流が始まりました。この2年間で12回を数えました。

筆者たちはこの活動を「本^{ほん}気^き田^だっちゃ、スマイルもりもりプロジェクト」(愛称「スマもり」)と名付けました。泉区「いずみ絆プロジェクト

支援事業」から助成金を受け、学生自らがデザインしたオリジナルの手ぬぐいを作成し、運動の際に使用しています。毎回、事前に1時間ほどのメニューを考えます。「恋するフォーチュンクッキー」「きよしのズンドコ節」に合わせ、座ったままできる体操を考案し、AKB体操やKIYOSHI体操とよんでメニューのなかに取り入れるようにもなりました。活動を始めた当初はお互いに緊張していましたが、回を重ねるごとに笑顔が増え、レクリエーション(ボッチャやボーリング、パターゴルフなど)では大変盛り上がり、距離が縮まってきました。運動だけでなく一緒にゆっくりお茶が飲みたいと誘っていただけるようにもなりました。「ぬくもり会」の会員からはこの活動に関して多くの支持をいただき、「楽しかった」「気持ちが明るくなった」など、予想以上に大きな効果をもたらしています。学生にとっては、お茶の時間に戦争体験や趣味のお話などを聞かせていただくのが大きな収穫です。他の地域から嫁いできたお嫁さん同士で「50年の付き合い」と聞くと、学生は目を丸くして驚くと同時に、「地域」には家族とはまた別の絆があることを感じているようです。

スマもりは、将来的には学生たちが参画しなくても地域の方々が自主的に運動を行い、主体的なグループの運営が継続できることを目標としています。それが介護予防運動自主グループの本来の姿だからです。地域の方々が住み慣れた場所で、自分たちの力で自分たちの健康を守っていけるようになるまで、筆者たちスマもりの活動は続きます。

平成 29 年度日本在宅ケア学会論文賞受賞に寄せて —優秀論文賞受賞者，奨励論文賞受賞者より—

◆平成 29 年度日本在宅ケア学会優秀論文賞



杉山 京

岡山県立大学大学院保健福祉学研究科
日本学術振興会特別研究員 (DC1)

■受賞論文 原著

地域包括支援センター専門職を対象とした認知症が疑われる高齢者への受診援助におけるかかりつけ医との連携実践状況の類型化

杉山 京 (岡山県立大学大学院保健福祉学研究科)
(日本学術振興会特別研究員 DC1)

竹本与志人 (岡山県立大学保健福祉学部保健福祉学科)

[日本在宅ケア学会誌 Vol.20 No.1 掲載]

◆平成 29 年度日本在宅ケア学会奨励論文賞



小林れい子

聖徳大学看護学部看護学科

■受賞論文 研究

配偶者がいない高齢男性のデイケアへの適応に関する研究；デイケアの場になじんでいくプロセス

小林れい子 (聖徳大学看護学部看護学科)

水戸美津子 (聖徳大学看護学部看護学科)

[日本在宅ケア学会誌 Vol.20 No.1 掲載]

このたびは平成 29 年度日本在宅ケア学会優秀論文賞の栄誉を賜り，大変光栄に存じます。本研究にご協力いただきました地域包括支援センターの専門職のみなさまに，心より感謝申し上げます。

本研究は，地域に潜在する認知症が疑われる高齢者の方々を鑑別診断に向けた認知症専門医への受診を円滑に進めるため，地域包括支援センターとかかりつけ医との連携の実態を明らかにしたものです。認知症高齢者がますます増大することが予測されるわが国においては，その対策を講じるための研究が早急に求められています。

今後も臨床で活躍されているみなさまの一助となるよう，今回の受賞を励みに，研究を継続していきたいと思ひます。引き続き，ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

このたびの平成 29 年度日本在宅ケア学会奨励論文賞の受賞におきましては，ご協力いただきましたデイケアの利用者，スタッフのみなさま，研究のご指導をしてくださりました先生方に厚くお礼を申し上げます。

今回，受賞対象となった論文は，男らしさ，男の沽券といったプライドや強さを求められる男性の定年後の会社組織から地域社会へという生活の変化や，介護を必要とする現実への適応の態様を，配偶者がいない高齢男性のデイケアに馴染んでいくプロセスに焦点を絞って過程を明らかにし，支援を検討するといったものでした。

M-GTA の提唱者である木下先生は「1 つの研究結果が実践現場に引き継がれていく」と著書の中で述べられています。私も高齢者等の支援の場に役立つ知見を得ることができるよう研鑽を積んでまいりたいと存じます。今後ともご指導ご鞭撻のほど，よろしくお願い申し上げます。

各種ご案内

ニュースメール配信用 メールアドレス登録のお願い

本学会では、会員のみならずへ迅速に情報提供を行うために、「ニュースメール」（不定期／年数回）を配信しております。未登録の方は会員専用サイトにて登録情報入力フォームよりご登録いただくか、会員登録事項変更届のご提出をお願い申し上げます。

実践および研究助成金について

■第5回実践および研究助成選考結果■

＜平成30年度助成者＞ ※助成額：各20万円

◇No.18-001「Patient Flow Management 導入による入退院支援（外来看護）システムの実践」

坂井 志麻，池田 真理（東京女子医科大学看護学部），近藤 芳子，杉本文美子（東京女子医科大学病院看護部）

◇No.18-002「在宅でがん末期患者を看取る若い世代の家族介護者への支援；家族の支援ニーズに関する研究」

鈴木真智子（貞静学園短期大学）

◇No.18-003「新卒訪問看護師育成プログラムの検討」

館向 真紀，野村 陽子（岩手医科大学看護学部）

■第6回実践および研究助成募集について■

募集期間：2018年10月1日～11月30日（予定）
応募資格：実践および研究代表者は当学会員（入会手続きが完了している者）であり，該年度の会費を振り込んだ者。

※詳細が決定次第，学会ホームページに掲載予定。

第23回日本在宅ケア学会学術集会のご案内

- テーマ：超高齢社会における在宅ケアの課題と展望
- 学術集会長：岡田 進一（大阪市立大学大学院生活科学研究科）
- 会期：2018年7月14日（土），15日（日）
- 会場：大阪国際交流センター
〒543-0001 大阪府大阪市天王寺区上本町8丁目2-6

●主なプログラム（予定）

○7月14日（土） 10：15～17：45

■学術集会長講演「在宅ケア向上の鍵となる地域ケア会議の今後の課題と方向性」

■特別講演「在宅ケアにおけるスーパービジョン」

■教育講演

- 1「在宅看護の現状と課題」
- 2「ソーシャルサポートネットワークの現状と今後の方向性」
- 3「調査法の基礎：質問紙作成の方法（信頼性と妥当性）」
- 4「在宅における終末期ケアのあり方」

■ランチョンセミナー

- 1「認知症情報最前線」

■ワークショップ

- 1「新卒訪問看護師育成における訪問看護ステーション受け入れ体制の課題」
- 2「生活と医療を統合する継続看護マネジメント2」

■市民公開講座「地域における認知症ケアと家族支援」

■口演発表, ポスター発表

○7月15日(日) 9:00～16:00

■シンポジウム

- 1「地域における多職種連携のあり方と今後の課題」
- 2「地域包括ケアにおけるケアマネジメントの位置づけと今後の課題」

■教育講演

- 5「認知症初期集中支援推進事業の現状と課題」
- 6「地域でのコンフリクト解決の理論と方法」

■ランチョンセミナー

- 2「若年認知症者に対する地域ケア」

■委員会企画

- 1「学会活動推進委員会」
- 2「政策提言検討委員会」

■口演発表, ポスター発表

■平成30年度論文賞受賞者記念発表

■会員報告会

事前参加（学術集会・懇親会）申込締切日：2018年5月25日（金）

12月中旬にご送付申し上げました郵便振込用紙（会員用）または、郵便局備え付けの払込取扱票に必要事項を明記のうえ、参加費（懇親会費）をお振り込みください。振り込みの確認をもって、参加申し込み完了となります。

●必要事項

口座番号	00160-2-265368			
加入者名	日本在宅ケア学会学術集会			
記載事項	①会員番号（非会員の場合、非会員と記入）	}	→ 通信欄に記入	
	②参加者名			
	③フリガナ			
	④懇親会参加の有無			
	⑤郵便番号・おところ・連絡先電話番号・おなまえ	}	→ ご依頼人欄に記入	

※ネットバンキング等からのお振り込み、現金によるお支払い等は受け付けておりません。

●当日参加申込方法

当日、会場受付にて参加申込書に必要事項をご記入のうえ、参加費を添えてご登録ください。

●参加費

	2日参加 (抄録集1冊含む)				1日参加 (抄録集なし)
会 員	[事前]	8,000 円	[当日]	10,000 円	[当日] -
非 会 員	[事前]	10,000 円	[当日]	12,000 円	[当日] 6,000 円
大学院生 ^{*1}	[事前]	-	[当日]	4,000 円	[当日] -

*1 抄録集なし/大学院生の方は、学生証の提示が必要となります

◆お問い合わせ◆

第23回一般社団法人日本在宅ケア学会学術集会運営事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4-1-1 オザワビル 2F 株式会社ワールドプランニング内

TEL: 03-5206-7431 FAX: 03-5206-7757 (常設) E-mail: jahc23@worldpl.jp